

【原作】乙倉 俊
【戯曲・監修】白神 貴士

【登場人物】

阿曾女	…
温羅(吉備の冠者)役者	…
秋鹿	…
五十狭芹彦(吉備津彦)	…
吾田媛・巨鳥(ガルータ)	…
秦の蔵人	…
山犬(大神)・書道	…
阿曾媛	…
耶夜	…
伎加	…
百襲媛	…
卑弥呼	…
楽々森舎人	…
犬飼命	…
留玉臣	…
ヤマトの軍団	…
長老	…
伊草 (父)	…
伊草 (子)	…
農奴・たたら吹き of 工人たち・加夜の人々…	
大猿(ハヌマーン)	…
黒子(3名)	…
▼鍛冶	
川島一城さん(刀匠)	

【演奏】

▼和太鼓
beZen 鼓空
▼チャンゴ
曹永姫(チョヨンヒ)+韓国伝統公演芸術団
▼SAX 等
赤田晃一
▼Kyb 等
赤田美由紀
▼歌
蛹(さなぎ)

序曲…和太鼓とチャンゴ中心の「序曲」が流れる。
【第〇場】アゾメ-阿曾女

阿曾女、進み出て観客席に頭を下げる。

阿曾女

「[曇りなら]
この灰色に瞳を閉じた夜空の臉を突き抜け、雲の上へと意識を昇らせれば
[雨なら]
このしとしとと頬を濡らす天の涙を拭いながら、雲の上へと意識を昇らせれば
[風が吹いていたら]
この吹きすさぶ風の声に耳を澄ませ、眼球を天へと向かう階に据え付ければ
[晴れなら]
天を望めば、

今宵も悠久の星空は艶やかに瞬き、指を伸ばせば触れることさえ出来そうに見えます。されどその星への道のりは遥かに遠く、この目に触れる煌きは、私たち裸の猿がこの星に生まれ出ずとずっと以前の物かも知れないのです。宇宙は無限とも思える時間を抱きしめて、ただ微笑んでいます。過ぎ去った時間が本当に存在するのか、一寸先の未来が本当にやってくるのか哀れ猿たちには、知るすべもございません。その様な余分事を考える頭になったのが、そもそも不幸の始まりに違いありません。そこで、猿たちは、『信じる』ということを感じました。涼やかな夜空を突っ切って、この星を覆う薄っぺらな大気の中を西へと向かった先、宇宙から見れば、つい一瞬前、でも私たちには遥かな昔のこと、赤茶けた、或いは鈍い灰色に光る重い石を、炎に溶かし、伸ばしては折り曲げて叩き、水にくぐらせ、磨き上げて造り上げた、堅くしなやかに輝く金属…『鉄』を信じて遠い遠い旅に出た者が居りました…苦難に耐え、栄華を誇り、失い…その者たちがたどり着いた場所こそが、ここ…真金ふく吉備の中山でございます。その者の名は『温羅(Ura)』と申します。

申し遅れました…

私は、御釜殿で温羅様に仕えております阿曾女でございます。湯を沸かして温羅様の唸り声が聞こえるか聞こえぬかで吉凶を占っております。温羅と申しますのは、あなた様方の言われるところの…『鬼』でございます。

その昔、あちらの方の山の上にある鬼ノ城、おにのしろと呼ばれる山城におったといわれている鬼でございます…その頃は、この辺りまで『吉備の穴海』と呼ばれる海があったそうで倉敷なんかもほとんど海の中だったそうです。ここ、吉備の地で御伽噺「桃太郎」の源流とされるのが『温羅』の伝説でございます。この物語は、室町時代の成立と推定される『鬼城縁起』に始まり、幕末期の『吉備津宮縁起』に至るまで、六つの資料が残っておりますが、実はそれぞれ様々に違っているのです。鬼の正体ひとつとっても「天竺(インド)から来た鬼神『剛伽夜叉(ゴウキヤヤシヤ)』」、「日本侵略にきた新羅の国王『(吉備津の)冠者(カジャ)』」、「大唐の白齐国の皇帝だった『吉備津冠者(キビツノカシヤ)』」、「百済の王『温羅』」、「百済の皇子『温羅』」と変化し…その最後も、首を斬られ退治されたとする『鬼城縁起』以外は、降参して吉備津彦の家臣、吉備の守護神となり、180歳まで生きたとする資料もございませぬ。

果たして温羅の正体は何だったのでしょうか？

吉備津彦はなんと281歳まで永らえたと書いてあるのは本当でしょうか？
古代出雲、ヤマトとは、都怒我阿羅斯等(つぬがあらしと)、百襲媛、たたら製鉄…そしてKAYAとは？

いつしか、そんな事ばかりが頭の中を巡りはじめ、夜ごと夢の中に、角がある大男が現れるようになりました。その男はまん丸な目をぎらぎらと光らせながら…私に向かって、『温羅』と名乗ったのでございませぬ…」

阿曾女、去る。

【第一場】ウラ-温羅

[第一景]

声

「温羅じゃあ〜！！ 温羅が出たぞお〜！！」

農奴数人が登場し、荷物を置いて逃げる…

巨大な牛頭の鎧を被り、棒を持った温羅に追われて逃げ去るヤマトの兵たち。
温羅が荷物の元に戻ると
農奴が一人物陰から出てくる。

農奴

「吉備の冠者、いや、温羅！…様…」

温羅

「何じゃ？」

農奴

「わしも連れて行ってつかあさい…そっちが、ええ…」

温羅、農奴の顔をじっと見定めて

温羅

「…名前は？」

秋鹿

「わしゃあ、児島の秋鹿(あいか)じゃ」

温羅

「そうか。ついてくりゃあええ。」

温羅、山ほどの荷を担ぎ、踵を返す。
秋鹿、残された荷を持って、後へ続く。

[第二景]

タタラ製鉄・鍛冶の場。たたら吹き踊りを踊る。
前景に川島一城さん(刀匠)リアル刀鍛冶。

♪ 真金の歌

たたら吹け吹け 火の粉の祭り

あがる炎が 胸焦がすよ

真金吹け吹け 炎の色に

明ける夜おさが 胸焦がすよ

かたな打て打て 火の粉の祭り

槌の響きが 胸を打つよお

たたら吹け吹け 真金吹け

たたら吹け吹け かたな打て

[第三景]

秋鹿

「鉄う作つとるんか…そしたらあんたは出雲か？」

温羅

「いいや違う。出雲にも寄ったが、もっと遠(とい)いところから来たんじゃ。」

秋鹿

「ヤマトの方か？あんたみたいな肌の色でそねーにでけえ人は見たことがねーが…」

温羅

「いいや、海の向こう…朝鮮という半島に伽耶という国を作つとった…
元々の先祖ゆーたら、もっと遠い。はるか天竺のアヨーディーヤーやガヤから来たんじゃ。」

秋鹿

「そうなんか、わしゃあ生まれてこのかた、どけーも行つとらんけえ…
どのくれーといーんかよーわからんが…ぼっけえといーんじゃな。」

温羅

「秋鹿は出雲とヤマトどっちじゃ？」

秋鹿

「どっちも嫌いじゃ…どっちなんか、よーわからん。」

温羅

「もともとの者(もん)か？」

秋鹿

「…そーじゃ。わしらあはずーつと昔から、ここにおつたんじゃ。
貝をとって、タコおとって、魚あとって、鳥いとって、鹿あとって、イノシシとって、
キノコや木の実い食べて生きて来た…そけえ『クニツクリ』のもんらあが来て、
『こっからあっこまではわしらの土地じゃ、おめえら米え作れ』言われて、
そっからあずーつと奴隷ぐらしじゃ…やれ、出雲じゃ、吉備じゃ、ヤマトじゃゆーて、
仕える相手はどんどんかわりよーるけど、どれも同じじゃ…けどなあ…」

温羅

「…けど？」

秋鹿

「ヤマトあ一番よーねー。出雲の方がましじゃった。」

温羅

「…そうか…ならなあ…」

秋鹿

「…なら？」

温羅

「わしゃあ、も少しましにすらあ。こかあ、えー鉄が採れる。
わしゃあヤマトと違うて、ここから搾り取るつもりやーねえ。
わしゃあ、こけー第二の伽耶、故郷を作りてーんじゃ。秋鹿、手伝おてくれえ。」

秋鹿

「…故郷か。ならわりい国にやあせんじやろう…よっしゃ、わかった…
わしゃあ手伝うで！」

温羅

「秋鹿！」

温羅が嬉しくて思わず肩を叩くと秋鹿吹っ飛ぶ…「あああ」と助け起こす温羅

[第四景]

阿曾媛(あぞひめ)登場。

阿曾媛

「夜叉! 無事だったのね! 嬉しい! 夜叉~!!!」

阿曾媛駆け寄り、温羅の廻りで踊るようにして抱きしめ…秋鹿に気づく。

阿曾媛

「誰？」

温羅

「今日、仲間になった…秋鹿じゃ。秋鹿、これは安良女、今の呼び名は阿曾媛じゃ。」

秋鹿

「温羅、さっき阿曾媛があんたを夜叉ゆーて呼びよーたが？」

温羅

「わしにゃ一色んな呼び名があるんじゃ。『剛伽夜叉(ごうきややしや)』も、そのひとつ…意味は剛い伽耶の夜叉ゆ一ことじゃ。」

秋鹿

「ええっ！じゃあ温羅は？」

温羅

「先祖の信じとった神様の名前じゃ…本当はアスラ(Asura)とか、アッシュール(Asshur)とも言うたらしい。天竺よりもっと昔の話じゃ。天竺ではガヤ・アスラと言うとな…(声ひそめ)」

秋鹿

「え、なにになに？」(と、側へ寄ると)

温羅

「『悪魔』のことじゃあ！！」

秋鹿

「ええっ！悪魔！？」

温羅

「わしらは天竺で『悪魔』と言われとったんじゃ…」

秋鹿

「ありゃあ…温羅って悪口じゃったんか…申し訳ねえ…」

温羅

「気にせんでもええ。わしやあ『角がある人』ゆ一て呼ばれとったこともある…温羅はまだマシじゃ。呼びやしーし、結構気に入っとる。」

秋鹿

「『温羅』は、優しいなあ…『やさしい悪魔』か…」

一同吹き出す。去ってゆく。笑い声が遠ざかる…霞みか霧か…辺りに異様な煙が立ち込める…阿曾女登場。

阿曾女

「ガヤは今では『ブッダ・ガヤ』…お釈迦様が悪魔の誘惑・脅迫を退け悟りを開いた場所として有名です。元の地名、ガヤ・アスラとは英語に直すと『ザ・デーモン』＝悪魔のことです。さて、そうこうしております間に、舞台はいつのまにかヤマトの都近くへ…」(去る。)

【第二場】イサセリヒコ-五十狭芹彦

霧の中、弓を捨て、矛を手に進む武人・五十狭芹彦。前方に立ちふさがる女性武将。手には直剣を持っている。

吾田媛

「我は武埴安彦命(たけはにやすひこのみこと)の妻、吾田媛(あたひめ)！そは何者ぞ！」

五十狭芹彦

「我は五十狭芹彦、帝の命を受け、謀反人を退治に参った！」

矛を振るう。吾田媛躲して。

吾田媛

「うぬら四道将軍が出立しもぬけの殻となる都を狙うたに…誰が秘密の企てを漏らした！」

五十狭芹彦

「北陸に派遣された甥の大彦が和珥坂で小娘の不吉な歌を聴いた！」

矛を振るう。吾田媛連続して躲す。

五十狭芹彦

「胸が騒いでわが姉、百襲媛に占わせたのよ！」

矛で突くが反撃される。吾田媛の連続攻撃を凌ぐ。

吾田媛

「無念なり！今頃は帝の首、秦の蔵人の首をとっておったはず！」

五十狭芹彦、攻撃を受け止めて、

五十狭芹彦

「何故あって、その様な恐ろし気な企てを！」

吾田媛

「…民は疫病や飢饉に苦しんで居る…このような時に何が戦だ！」

飛びずさって剣を避ける五十狭芹彦。

五十狭芹彦

「帝はならばこそと！世が定まらぬ故に災いが起きるのじゃと…」

吾田媛

「…笑わせるな！」

剣を受け止める五十狭芹彦。

吾田媛

「…武具の調達やら兵糧の調達にかこつけて、おのが領地を広げようとの
秦の蔵人の入れ知恵を真に受け、すっかり騙されておるのじゃ！
そのような愚鈍な帝など国を傾ける災いの種…さっさと取り除かねば、
恐ろしいことが起きる！」

五十狭芹彦

「我はその帝の血を受けた者…謀反人の世迷言など聞く耳は持たぬ！」

吾田媛

「その耳塞ぐなら大穴を開けてやるまで！」

互いに跳びずさり、激しく打ち合う二人。

そこへ五十狭芹彦の加勢にヤマトの兵が到着する。

五十狭芹彦

「手を出すな！」

隙を見つけた吾田媛に矛の柄を真っ二つに斬られる。

加勢の兵の槍が吾田媛を背中から貫く。

五十狭芹彦

「吾田媛！」

五十狭芹彦、吾田媛を腕に抱く。

吾田媛

「…土地の民の声が聞こえぬ帝など…長くはない…お前もな…
西には恐ろしい鬼がおるといふ…五十狭芹彦…喰われてしまえ…」

吾田媛、目を見開いたまま死ぬ。瞼を閉じさせる五十狭芹彦。

兵、死体を担いで運ぶ。

【第三場】ハタ-秦

五十狭芹彦ゆっくりと歩む。その背後に現れる影…秦の蔵人。

秦の蔵人

「吾田媛、討ち取られたとのことおめでとうございます。」

五十狭芹彦

「蔵人か…めでたくはない。わしが討ったのでもない。」

秦の蔵人

「これで心おきなく西国を平げに出立されることができますな」

五十狭芹彦

「ふん…はは…蔵人、吾田媛がお前の名を出したぞ」

秦の蔵人

「はて？」

五十狭芹彦

「民は疫病や飢饉で戦どころではない…
今度の戦はお前の私腹を肥やす悪だくみだとな。」

秦の蔵人、高笑いが始まって終わらない。
毒気を抜かれた表情の五十狭芹彦。

秦の蔵人

「ははははは…何とも面白いお話だ…ですが、五十狭芹彦様。こちらに兵力があり、
兵糧の豊富な今を逃しては、 こういった謀反の種を取り除くことはできません。
今のうちなら近隣をすっかり平らげ、世から戦さを無くすことができるのです。
それこそが、最も民の為になるのではありませぬか。」

五十狭芹彦

「お前の一族は皆話がうまい…きっと頭が良いのであろう。
いっそお前たちが帝になって戦をすれば良いのではないか？」

秦の蔵人

「人には得手、不得手がございます…私どもが戦に行ってしまうとは、
外国(とづくに)との交渉事やら、ヤマトの細々とした政(まつりごと)、
そもそも武器や兵糧や兵(つわもの)をそろえる事など、人にうとまれ、
嫌われるような仕事まで全てお任せしなくてはなりません…」

五十狭芹彦

「話を聞いておると、お前たちには全て出来るが、わしらには出来ぬとしか聞こえぬ…」

秦の蔵人

「滅相もない…戦で五十狭芹彦様の右に出るものなど、この秋津洲、
日の本の島々にはおりませぬ。」

五十狭芹彦

「…戦は気が進まぬ。吾田媛も言うておったが、吉備には鬼がおるそうな。
鬼は秋津洲の外から来たのだろう。」

秦の蔵人

「元より、それは帝とて、われらとて同じ。今この時に秋津洲の土を踏んでおるもので、
五十狭芹彦様にかなう者はおりませぬ…おお、そうだ…五十狭芹彦様は、吉備の冠者、
鬼ノ城に棲む鬼が、どれほど民を苦しめているかご存じないのだ。」

五十狭芹彦

「なんと。」

秦の蔵人が見てきたように語る妄想がらみの温羅の話が舞台に出現する…

秦の蔵人

「遠く天竺に棲んでおったというこの鬼、身の丈は一丈三尺、怒ると炎を吹きます。
夜な夜な山々を焼き、吉備の空は夜通しあかあかと焦げておるそうです。
投げる岩は薪の様に燃え上がり、水さえ油の様に燃やしてまいります。
昼間は国中を駆け跳んで、民の妻子をとり喰らい、家畜を殺し年貢米を奪い、
ありとあらゆる物を喰いつくすので、国中の老若男女が逃げ惑い、嘆き悲しんで
おります…そればかりではありません。
この鬼は女にも眼がなく、吉備に暮らす女という女は幼子から老女まで、
ことごとくその毒牙に掛かって鬼の子を身ごもり、生まれた鬼子は一年も経つと
並みの大人より大きく猛々しく育って暴れまわるので限(きり)がありません。
自らに逆らうもの、妻や娘を食料を差し出すのを拒むものは腹心の部下でも引き裂いて
殺してしまうので、もう誰もこの鬼に逆らう者はおりませぬ。
逆らえば、いや、一瞬ためらっただけでも命がなくなるのですから…
弱い者相手に強だけでなく、ヤマトの正規軍と戦う折には、赤い翼を持ち、
身は炎のごとく黄金色に輝く巨大な鳥や、身の大きさを変え、空を飛び、
雷の様な声で吠える猿が守護神の如く出現して、鬼に加勢するそうです。」

五十狭芹彦

「…その鬼の名は？」

秦の蔵人

「人呼んで吉備の冠者、名は温羅…と、申します」

五十狭芹彦

「…温羅！」

秦の蔵人去る。
再び、霧がかかる。
霧を裂いて怪しき光。

【第四場】モモソヒメ-百襲媛

百襲媛が静かに現れる。

百襲媛

「温羅は…確かに恐ろしい鬼です。
けれど…吉備には、五十狭芹彦…お前が行かねばなりません。」

百襲媛、五十狭芹彦を座らせ、神懸って舞う。
天地の気を一身に集め、それを二面の鏡に注ぎ、魔鏡を作り上げ三方に置く。

百襲媛

「五十狭芹彦…温羅は恐ろしい敵ですが、お前が出会わねばならない者です。
吉備は祖先の地、お前の運命が待っています。心してお行きなさい。」

五十狭芹彦

「どんな運命にも決して挫けぬ覚悟で吉備に参ります…ありがとうございます姉上。」

五十狭芹彦、恭しく鏡を頂く。

阿曾女

「さて、ヤマトの軍が攻め込む前にカヤがどんな国で、どんな民が棲んでいたのか、
それを拝見に参りましょう…」

阿曾女、去る。霧が晴れる。

【第五場】カヤ-加夜

温羅に続いて加夜(温羅が吉備に拓いた国)の人々が幸せな笑顔で現れる。
長老が桃の実を持って現れ、それを阿曾媛に渡す。

♪カヤ賛歌

山に木霊すあの歌声は 吉備の冠者たるあの温羅様が
ほんに好いたる阿曾媛様を 恋し恋しと呼ぶ声じゃろか
仲が良い良いその幸せを 分けてもろうて畑に植えてえ
春に花咲き夏には育ち 出来た赤子がこの桃の実じゃ
撫でてさすって剥いては見ても 虫に喰わせるわけじゃねえ
誰に喰わそかや～ 誰に喰わそかや～
加夜は里中 桃だらけ 加夜は里中 桃だらけ

歌い踊る加夜の人々。笑顔で見ている温羅。
温羅、子どもたちと客席へ花や御菓子など(備中神楽で大国主が投げる福の種のように)投げ入れる。

♪ "Utopia Ura-Ja" 作詞：蟠龍（ばんりょう） 作曲：蛹（さなぎ） [2000年]

二、

戦（いくさ）に 破れ海渡る
傷を癒やすは 吉備の民
心優しき 吉備の冠者
故郷（ふるさと）懐（おも）いて山城（やましろ）築く
諸人集いて ひらくは宴（うたげ）
吉備の冠者よ 温羅様よ

三、

吉備の地 栄えさせ給うた 異国の皇子（みこ） それは吉備の冠者
歴史に埋もれし その名こそ 吉備の冠者よ 温羅（うら）様よ
諸人集いて ひらくは宴（うたげ）
吉備の冠者よ 温羅様よ
桃の華（か） 馨（かお）り 桃の実 豊（みの）る
桃源の郷（さと）よ 平和の郷よ
桃源の郷よ 平和の郷よ

幸せなひと時…突然、飛来した大量の矢。それが幾人かを骸に変えた。

秋鹿

「ヤマトじゃ！ヤマトが来たぞお～！」

皆が死骸を背負い、足を引きずり去ってゆく。
阿曾媛、秋鹿は長老をかばって去る。
事切れている夫の手を握り、寄り添う耶夜(やや)。
夫の名を呼ぶ…

耶夜

「伊草！ 死なんで伊草！」
伎加(あやか-耶夜に駆け寄り腕を引っ張る)
「逃げんと！お腹の子供ど一すん！耶夜！」

耶夜

「伊草！伊草～！！」

温羅

「わしに任せえ。」

温羅が伊草を背負って、三人一緒に去る。

【第六場】キビノナカヤマ-吉備の中山

[第一景]

吉備の中山に陣を張る五十狭芹彦たち。
五十狭芹彦の部下、犬飼命・留玉臣が控える。
楽々森舎人が帰って来る。

楽々森舎人

「ただ今帰って参ったでござる。」

五十狭芹彦

「ご苦労だった楽々森舎人、首尾はどうだ？」

楽々森舎人

「油断して浮かれておりましたので挨拶代わりに矢を射かけました処、
上々の首尾でござる。」

五十狭芹彦

「今頃は慌てておろう…こちらも油断せぬように。
鬪いの用意が整えば恐ろしく手強い敵の様だからな。
何やら巨大な猿やら鳥やら使うそうだ…犬飼命、例の物は出陣出来るのか？」

犬飼命

「うー、直ぐにでも、うー、大丈夫でございます。」

五十狭芹彦

「留玉臣、あれは持って来たか？」

留玉臣

「はい。百襲媛様の鏡二面…これに用意しておりますけん。」

と、何やら箱(か包み)を見せる。

五十狭芹彦

「吉備の冠者、温羅と申す恐ろし気な鬼、どれほどのものか早う見たい。」

犬飼命

「うー、腕が鳴ってしょうがありません。うー。」

留玉臣

「早うこれを使うてみとうて…仕方がないですけん。」

楽々森舎人

「鬪いはいつ始めるのでござる？楽しみでなませぬ！」

五十狭芹彦

「…明朝、夜明けと共に開戦だ。」

五十狭芹彦を残して、ヤマト勢去る…怪しい雰囲気は漂い始める。

[第二景]

仰向けに横になり眠る五十狭芹彦…何かの気配を感じる。
目を覚ます五十狭芹彦。人影がある。

五十狭芹彦

「あなたは…」

卑弥呼

「我が名は卑弥呼…かつて、この吉備を治めたもの…。」

五十狭芹彦

「では…百襲媛の。」

卑弥呼

「うむ。」

五十狭芹彦

「(頭を下げ)では、教えて頂きたい。我らは明日、温羅に勝てるでしょうか？」

卑弥呼

「負けはせぬ…だが、勝つであろうか。」

五十狭芹彦

「それは…一体…」

卑弥呼

「温羅と戦えばわかるであろう。」

五十狭芹彦

「…はい。」

卑弥呼

「五十狭芹彦、お前が何と戦い、何に勝とうとしているのか…
勝って何をしたいのか…よくよく考えるがよい。」

卑弥呼、消える。

五十狭芹彦

「卑弥呼様！」

声に驚いた楽々森舎人が現れる。

楽々森舎人

「五十狭芹彦様…なんの騒ぎでござる？」

五十狭芹彦

「卑弥呼様が…いや、夢をみた。何でもない。」

楽々森舎人

「…(高笑い)お気が早っておられるのでござる。
早くも御一人で戦を始められたかと思ったでござる。
山中の禱とて、木の葉のざわめき、月影のゆらめき、
気が立ち、気になって眠られぬこともございましょう。
宜しければ、私が添い寝の夜伽をいたしましょうか？」

五十狭芹彦

「いや、お前に寝られては、鼾で私が寝られぬ…すまぬが下がってくれ。」

楽々森舎人

「……なるほど…かしこまりましたでござる」

開戦前夜の緊張感ある音楽…闇に閉ざされた辺りがしだいに朝日が昇り白んでくる。

【第七場】キノジョウ-鬼ノ城

[第一景]

五十狭芹彦

「我が名は五十狭芹彦、御帝の血を引く西道将軍なり。暴虐非道な鬼神より、この地を解放するために参った。温羅よ！正々堂々雌雄を決っそうぞ！」

温羅

「侵略者はいつでも正義の名を借りてやって来る…暴虐非道はヤマトにこそ相応しい言葉よ。血に飢えたヤマトの皇子よ！引き上げるなら今のうちだぞ！」

五十狭芹彦

「お前こそ地獄へ舞い戻れ！そこが鬼に相応しい土地だ…たとえ首だけになっていようとも！」

温羅

「ヤマトめ…驚くなよ…ガルーダ、ハヌマーン、目にももの見せてやれ！」

巨大な鳥(ガルーダ)と巨大な猿(ハヌマーン)が出てくる。ヤマト軍じりじり下がる。

温羅

「ヤマトの人殺しども！……我が故郷の聖獣、ガルーダ、ハヌマーンに食いちぎられ、罪の報いを受けるのが嫌なら、さっさと逃げ帰って、子供でもあやしてろ！」

五十狭芹彦

「犬飼命！今だ！」

犬飼命が巨大な山犬(大神=狼)を鞭打つと一声吠え、前進…向かい合う。

五十狭芹彦

「二百年の歳を重ね、大神となりたる山犬！あほ猿やひね雉に引けはとらぬぞ！」

三匹、互いに間合いを図っているが、相手の手強さを感じたのかなかなか動けずにいる。

[第二景]

温羅

「山犬…ヤマトの犬か…！くそ！ガルーダ、ハヌマーンをひとまず下げよ！…弓矢組！」

加夜の弓部隊が進みでる。

五十狭芹彦

「行け！遅れをとるな！奴らに矢の雨をお見舞いしろ！」

ヤマトの弓部隊が進み出る。

加夜、ヤマトがそれぞれ鬨の声を上げ「弓の舞」。

弓矢を射ち合う。

温羅

「五十狭芹彦！わしは仲間の命が惜しい…どうだ、わしと一対一で勝負する勇氣はあるか！」

五十狭芹彦

「温羅！望むところよ！我が矢を受けてみよ！」

五十狭芹彦は楽々森から、温羅は秋鹿より渡された矢を射ち合う。
矢は中間点でぶつかって落ちる。繰り返すが、勝負がつかない。

五十狭芹彦

「くそっ！きりがないわ！」

[第三景]

百襲媛の姿が虚空に舞う。

五十狭芹彦

「姉上！」

百襲媛

「五十狭芹彦…一本で利かぬなら二本使いなさい…」

百襲媛消える。

[第四景]

五十狭芹彦

「…なるほど、姉上、礼を言うぞ。」

五十狭芹彦は2本の矢を弓につがえ、同時に矢を放つと、一本は喰い合うが、もう一本が温羅に矢を渡していた秋鹿に命中。

温羅

「秋鹿あ！！！」

温羅が思わず秋鹿を介抱しようとした時、イサセリ彦の放った矢が温羅の片目を射抜く。

[第五景]

五十狭芹彦

「留玉臣！鏡だ！」

留玉臣

「けん！（『はい』のイントネーションで）」

留玉臣は百襲媛の作り上げた魔鏡を取り出し、その魔力でガルータを、楽々森舎人は同じくハヌマーンを錯乱させる…

楽々森「流石、百襲媛様の魔鏡でござるな。」
留玉臣「凄い威力ですね！」

山犬＝大神も加わり温羅に向かう。加夜兵が矢を向けるのを制止、皆を退かせる温羅。皆を逃すために自身は仁王立ち…殺到しようとする三体の魔獣。

その目前で温羅は、鯉に変身し、矢のように川下へ逃亡しようとする…

楽々森「鯉に化けたでござる！」
留玉臣「行け！ガルータ！」

鯉の温羅をガルータが掬い上げ、五十狭芹彦の元へ連れ戻す…
五十狭芹彦が人に戻った温羅に剣を振り上げた瞬間、
多くの兵や吉備の民が走り出て、温羅の周りを取り囲む。
緊張の一瞬の後、兵は武器を捨て、民と共にひざまずく。

兵と民(口々に同じ意味の言葉を)
「冠者様を温羅様をお助け下さい。代わりにわたしの命を差し上げます。」

阿曾媛も額を土に擦り付けて

阿曾媛
「どうか…温羅を助けて下さい！代わりに私の命を！」

兵
「いえ私の命を！」

民
「私の命でお願いいたします！」

阿曾媛
「どうか……！！」

一同平伏する。

[第六景]

温羅、ゆっくりと立ち上がり人々や阿曾媛を制して、五十狭芹彦の前に。

温羅
「名前は何ゆ一た？」

五十狭芹彦
「五十狭芹彦だ。」

温羅
「五十狭芹彦…おめ一が今日から『吉備の冠者』じゃ。」

首を差し出す。見守る人々から悲鳴が上がる。五十狭芹彦、剣を振り上げる。
悲鳴が高まる。降り下ろす…と、剣は土に刺さっている。
温羅、ゆっくりと首を上げ、五十狭芹彦を見る。

五十狭芹彦
「温羅の首は刎ねた…そう、ヤマトには伝える。」

温羅
「こりゃあ、どねえなことじゃ？」

五十狭芹彦
「私の聞いていた温羅はお前のような男ではない。温羅は死んだ。
お前は生きて、ここ吉備を豊かで平和な国にする手助けをして欲しい。」

温羅
「…ヤマトにも、こういう男がおったということじゃ。」

温羅、みんなの方を振り返る。皆、頷く。
温羅、手を差し出す。2人、手を握る。

[第七景]

タタラ場に火が入り、火の粉が上がる…

子どもたちが走り回り、太鼓に群がり叩く。

長老、目を細めて子供たちを見ている…

と、一人物憂げに歩く耶夜。

子どもたちの太鼓が一定のリズムにまとまり、音楽が流れだす。

歌い始める耶夜。

♪ 輪廻

幾度も 星は巡り 幾度も 夏は過ぎる

夜の夢に 抱いても あの人は 遠く過ぎる 遠く過ぎる

幾度も 月は満ち 幾度も 風は渡る

少しずつ 少しずつ あの人は 還り来る 還り来る

あの夏の 微笑みで あの夏の 笑い声で 笑い声で

子どもの1人が駆け寄って笑いながら、耶夜に抱き付く。

耶夜

「こら、伊草！ こねーに大きゅーなっても、甘えん坊じゃ！」

伎加が、耶夜に近づき、伊草の頭を撫でる。

片目を布で覆った秋鹿が、長老に鹿の干し肉を渡そうとすると、長老、耶夜の方を目で示す。

秋鹿、にっこり笑って、耶夜に歩み寄り、肉を渡す。

耶夜、受け取って笑う。

伊草、肉を取って走り、子供たちを先導して去る。

それを楽し気に観ている秋鹿の後ろ姿を見ている耶夜。

耶夜の背中を押す伎加。驚いた耶夜に微笑みかけて駆け去る。

長老、にっこり笑って、皆を促し、去る。

秋鹿と耶夜の二人も手を繋ぎ、ゆっくりと歩き出して子供たちの後を追う。

【第八場】デンセツ-伝説

吉備にやって来た秦の蔵人。
微笑みかける吉備津彦を硬い表情で一瞥し、上座に座る。

秦の蔵人

「この度は帝の名代である。我を帝と心得て神妙に返答せよ。」

吉備津彦

「かしこまりました。」

秦の蔵人

「吉備の民の間に、死んだはずの温羅が生きておるとの噂がある…何故じゃ」

吉備津彦

「確かに…生きております。」

秦の蔵人

「なんと!…首を刎ねたと申したは偽りか!?…ただではすまぬぞ!」

吉備津彦

「その首が、生きていますのでございます…」

秦の蔵人

「…なんだと!」

吉備津彦

「さらしております首が、朝な夕な、昼も夜も唸り声を上げ、
村人は恐ろしゅうて野良仕事も手につきませぬ。
年貢にも差し支えております…そこで帝にお願いがございます」

秦の蔵人

「願いと?」

吉備津彦

「阿曾よりこちらへ温羅の妻を迎え、首を懸ろに弔い、社を建てて、
この怨霊を鎮めようと思ひます。つきましては、その費用、
また、温羅が鎮まりますまで…吉備の年貢をご容赦戴きたい…
もしこの怨霊が鎮まらぬようなことに成りますれば、
帝のお命に関わるかも知れませぬ故…と、帝に伝えて下され。」

秦の蔵人

「なるほど。合い分かりもうした……………五十狭芹彦様は…我らより、
随分と、上手(うわて)になられましたな…」

2人笑う。去ってゆく蔵人を見送り、吉備津彦もいずれかへ姿を消す。
阿曾女が現れる。

阿曾女

「物語も後少しとなりました。
それでは、吉備津彦と温羅の最後の物語を…静かに御覧ください…」

【第九場】 Utopia Ura-Ja

〔第一景〕

鬼ノ城近くの岩に座る温羅。吉備津彦がやって来る。

吉備津彦

「どうした？温羅」

温羅

「お呼びたてして申し訳ねーことじゃが…ちいと話を聞いてもれーてえんじゃ。」

吉備津彦

「温羅らしくもない。遠慮せず、何でも申せ。」

温羅

「吉備津彦様は吉備の中山に、わしはこの鬼ノ城で、それぞれ知恵を絞り、相談して吉備の国を治めて来た。」

吉備津彦

「ああ、お前のおかげで吉備は豊かで平和な国になった。」

温羅

「けれどな、そりゃあ、吉備津彦様という人がおってくれるから、そーなつとるんじゃ。ヤマトの吹っ掛ける難題もちよちよいと捌いてくれとる。向こうじゃて、吉備津彦様には対しては、そねーに無理なこともよ一言わん…じゃが、吉備津彦様がおらんよーになったら、どねーなことになるか…」

吉備津彦

「温羅は、どーなると思っているのだ？」

温羅

「…吉備はヤマトに呑み込まれるじゃろ。ヤマトに行った物部やこーは、吉備を自分のものじゃと思うとるかも知れん。」

吉備津彦

「私の目の黒いうちは、そんなことはさせん。」

温羅

「それじゃが。じゃけえ、吉備津彦様には100年200年、ずーっと目の黒いままでおつてもらおう。」

吉備津彦

「流石にそれは無理だ…人間、いつかは死ぬ。それが自然の摂理だ。」

温羅

「おう…じゃがな、実は、わしは違うんじゃ…この身には不死の呪いが掛かっとなる。殺されて首でも切られん限りは死ねん呪いじゃ。この呪いをお前に移す…」

吉備津彦

「ちょっと待て。それでは、お前はどうか？」

温羅

「わしじゃあ、もう180年も生きた。ええ加減、くたびれたし、やるこたあやった。もう思い残すこたーねえ…それじゃあ、ええか？」

吉備津彦

「待て！勝手に不死などにされても困る。」

温羅

「大丈夫。自分で死のう思うたら死ぬる。」

吉備津彦

「待て…温羅がいなくなるのは嫌だ…お前が居なくなったら、私は誰に相談すれば良いのだ？」

温羅

「わしが死んだら、阿曾の者にこの剣を溶かした鉄で釜を作らせてくれりゃあええ…そーすりゃあ、わしが湯う入れて炊いた釜の鳴る音で、えーかわりーか返事ゆーする。必ず、この吉備がもー大丈夫じゃ思うまで死んだらおえんで。わしの最後の頼みじゃけーな。」

吉備津彦

「本当に死ぬのか？」

温羅

「ほんまじゃ。…みてみい。ひばりが鳴いてあがりよーる。雲が白うて、空が青おて、えー風が吹きよーる。死ぬのにこんなにええ日はなかなかねー…そろそろやつてもらおうか…」

吉備津彦

「私が何をやるのだ？」

温羅

「わしの首ゆー落としてくれりゃあええ。それだけのことじゃ。」

吉備津彦

「な…何を言っている…」

温羅

「不死の呪いの掛かるとるもの首を落として、殺したもんには、不死の呪いが移るんじゃ…はよーやってくれえ。こう見えて結構覚悟もいっとんじゃ。」

吉備津彦

「そんなことが出来るか！温羅の首を落とすなど…私に出来るものか！馬鹿を言うな！！そんなことをしてまで不死になど…」

温羅

「あほお！！このどあんごう！！おめえのために言よーるんじゃねーわ！わしの為でもねえ！全てはこのKAYAに、吉備に棲んだる者たちの為じゃろーが！性根の腐ったよーなことお言よーたら、わしがおめえの首を落とすぞ！」

茫然とする吉備津彦の手に剣を握らせる温羅。跪いて首を差し出す。

吉備津彦

「温羅…」

温羅

「なんも言うな。昔、お前がヤマトに報告した通りのことじゃ…ちよっと遅ーはなっただけな。ずーっと、お前の様な男に嘘なんぞつかせとったらおえんと思うとったんじゃ。さあ、剣を頭の上に構えたか…わしが1、2、3ゆーて言うから、3が聞こえたらすっぱりやるんじゃ。失敗したら痛えけー綺麗に切ってくれーよ。3言うても切らんかったら、いつ切られるか怖おーなって心臓が止まるかも知れん。そねーになつたら無駄死にじゃけえ…失敗せんようにな。落とした首は釜を祀った下の土ん中へ埋めてくれえ…頼んだで。」

吉備津彦

「…温羅…」

温羅

「1…2…」

吉備津彦、温羅の首を落とす。痙攣する温羅の体…剣を捨てて抱きしめる吉備津彦。

吉備津彦

「…温羅～！！温羅あ～！！」

卑弥呼、吉備津彦の後ろに立ち、吉備津彦を優しく抱く。

吉備津彦、温羅の首(面の付いた兜)を取り、卑弥呼に渡す。

卑弥呼、温羅の首を捧げて歩き出す。吉備津彦続く。前方に立つ百襲媛が卑弥呼の前に跪く。卑弥呼の高く掲げた温羅の首から桃の種が零れ落ちる。皮袋に受ける百襲媛。

百襲媛

「卑弥呼様…」

卑弥呼

「百襲媛、いや、トヨ…ヤマトを、そしてこの秋津洲全てを、よく治めよ…吉備津彦、この吉備を良い国に…幸せな国にして、永く治めよ…」

百襲媛

「卑弥呼様…畏まりました。」

吉備津彦

「…畏まりました…何百年掛かりましょうとも、必ず、この国を温羅の作った加夜の国のように、良い国に致します！」

阿曾媛

「夜叉あ～！！」

阿曾媛が温羅の死体に駆け寄り抱きすがる。卑弥呼、歩み寄って阿曾媛に首を渡す。阿曾媛、首を抱きしめる。

卑弥呼、その阿曾媛をそっと抱きしめる。

[第二景]

音楽が始まる。登場人物たちが入って来る…『♪Utopia Ura-Ja』
最後、全員立ち上がって礼。
蟠龍氏が『加夜』の字を書き始める。

"Utopia Ura-Ja" 作詞：蟠龍（ばんりょう） 作曲：蛹（さなぎ） [2000年]

一、【演劇陣の動きで】
奥深く 心に木霊（こだま）す その聲（こえ）
古（いにしえ） 吉備の冠者（かじゃ）

歴史に埋もれし その名こそ
吉備の冠者よ 温羅（うら）様よ

諸人集いて ひらくは宴（うたげ）
吉備の冠者よ 温羅様よ

二、【ヨンヒさん】
戦（いくさ）に 破れ海渡る
傷を癒やすは 吉備の民

心優しき 吉備の冠者
故郷（ふるさと）懐（おも）いて山城（やましろ）築く

諸人集いて ひらくは宴（うたげ）
吉備の冠者よ 温羅様よ

間奏【KYOKOさん】

三、【総合】
吉備の地 栄えさせ給うた 異国の皇子（みこ） それは吉備の冠者
歴史に埋もれし その名こそ 吉備の冠者よ 温羅（うら）様よ

諸人集いて ひらくは宴（うたげ）
吉備の冠者よ 温羅様よ

桃の華（か） 馨（かお）り 桃の実 豊（みの）る
桃源の郷（さと）よ 平和の郷よ

桃源の郷よ 平和の郷よ

加夜の文字が書かれた布幕が揚る…ブラックライトで光る… 幕(第二部へ)

【参考図書等】

温羅伝説-史料を読み解く- 中山薫
おかやまの桃太郎 市川俊介
桃核祭祀は吉備邪馬台国の卑弥呼の鬼道か 楯築サロン代表 岡将男
物部氏の正体 関裕二 他
Wikipedia 他

"Utopia Ura-Ja" 岡山・いわとわけ音楽祭（2000年10月）
<https://www.youtube.com/watch?v=aLOxri7bQQZw>